

＜若手の会＞活動報告

日本家政学会若手の会は 1996 年に発足し、今年で 17 年目を迎えた。本年は「家政学、家庭科教育の進むべき道～家政学関連の研究者から若手への提言～」と題し、ワークショップを企画した。大会 2 日目の 5 月 19 日（日）13：50～15：20 昭和女子大学 D 会場にて開催され、参加者は 34 名であった。

本企画の目的は、「家政学の分野で活躍されている大学教員・研究者の方を講師としてお招きし、これから研究者としてキャリアを積んでいく若手教員・研究者に対し、これまでのキャリア、研究・教育と家庭生活との両立、大学での教育実践の工夫や研究生活などをお話いただき、若手研究者が学ばせていただく機会をつくる」というものである。今回は、3 名の講師の先生方お一人ずつからご提言をいただいた後に、各グループに分かれて自由に交流を深めた。

生活経営分野の斎藤悦子氏（お茶の水女子大学）からは、これまでのキャリア、教育・研究について、「チャンスにはためらわない」、「その時にしかできないことがあり、それを楽しむ」、「仲間を増やす」、「長期的視点で考える」、「ささいなことは気にしない」をキーワードにお話いただいた。ワークショップでは、就職、結婚、仕事の進め方に加え、人脈を広げる必要性について、プライベートなお話も含めてご紹介いただいた。

被服分野の猪又美栄子氏（昭和女子大学）からは、「低空飛行でも良い、落ちないように動き続けることが大事」、「協力を求めるのも一つの能力」というお言葉をご紹介いただきながら、研究・教育をどう進めてきたか、先輩や同僚にどう支えられてきたかについてお話しいただいた。ワークショップでは、プライベートと仕事の両立が難しい中で、やりたいことをフローチャートで示す、時間制約があるからこそ、仕事の質を上げることができるといった、研究を進める工夫とその必要性をお話いただいた。

食物分野の大久保洋子氏（元・実践女子大学）からは、実際のレポートをご提示いただきながら、授業の進め方や学生との関わり方についてお話しいただいた。ワークショップでは、学生に対し、「人に見せることを意識させながら授業内容をまとめさせる」、「学生自身が授業の構成メンバーであるという意識を持たせる」といった工夫に加え、良い例を示す大切さもお話いただき、センスを身につけるために、プロのシェフに来ていただく等のエピソードをご紹介いただいた。

企画終了後のアンケートでは「家政学は幅広い総合領域であるので、専門外の領域の先生のお話を伺えることは、大変有意義だと感じた」、「研究者という職業のロールモデルが周囲にない中で、その生き方についてのお話は大変有意義であり、進路への不安の根源を探ることができた」、「横のつながりを得ることができないので、また行ってほしい」などの意見が寄せられた。

今回、家政学の分野でご活躍されている先生方からこれから担っていく若手研究者が多くを学ばせていただいたのと共に、ご参加いただいた方による意見交換によって問題意識の共有や交流を図ることができた。今後も家政学研究の発展のための交流の場となるように、若手の会の活動を推進していきたい。

なお、アンケート結果の詳細および若手の会の活動については、日本家政学会若手の会 HP (http://www.geocities.jp/kasei_wakatenokai/) 上に公開している。

（若手の会幹事一同、 文責・安岡 絢子）